

北武藏における古墳時代後・終末期の諸様相

杉 崎 茂 樹

はじめに

1. 後期前方後円墳の展開とその終末
2. 前方後円墳終末後の有力古墳

3. 群集墳の築造と古墳の終焉

まとめにかえて

論文要旨

まず最初に、古墳時代後期の北武藏各地域での前方後円墳の築造状況を概観する。

北武藏の90基ほどの前方後円墳は大半が後期の築造とみられ、後期に前方後円墳の築造が急激に増大する。

特に、同時期のわが国全体でも、屈指といえる規模の大形前方後円墳が、前代までさしたる古墳のない埼玉県北部の行田市の埼玉古墳群と周辺地区に突然として出現し、およそ1世紀の間、築造が継続されることが特筆される。墳丘規模の卓越性から、その被葬者は畿内政権を後ろだてに広域を統治した新興の北武藏の最高首長層だったと推定される。

このほか各地域で後期に至り多くの中小規模の前方後円墳が出現しており、これらは大形前方後円墳の下位に位置する小地域首長層の古墳と考えられる。

しかし、6世紀末ないし7世紀初頭段階に前方後円墳の築造は規模の大小を問わず停止するに至る。かわって有力首長層が自己の墳墓型式に採用したのは大形の円墳や方墳だった。こうした動きは、当時の畿内首長層の前方後円墳廃絶およびその後の造墓活動と対応した動きであった。

次に、北武藏での小首長層の台頭を物語る後期群集墳の消長は、大形前方後円墳の築造開始と期を一にして生起するものや前方後円墳の廃絶とほぼ同時期に生起するものなど一様でなく、個性がある。そして築造停止の時期もまた各様であるが、8世紀初頭までに築造が停止されている。

こうした現象は同時に古墳の築造停止、すなわち古墳時代の終焉を意味し、その背景には古墳という葬制を介した地方勢力の統治がもはや畿内政権にとっても地方勢力にとっても形骸化したことを見出す。すなわち、これにかわる律令的身分制度の波及が予想された。